説教20201213サムエル下7：4、8-16　ルカ1：26-38 　讃美歌21-242　218　Ⅱ112

「お言葉どおり、この身に成りますように」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちのうちにもおのぞみ下さい。

　待降節第３主日を迎えました。ついに３本のローソクに火が灯されました。私たちは一周ごとにローソクの火が追加されていくのを見てきました。その営みは規則的で着実で、同じことの繰り返しであります。又、その営みは毎年同じように繰り返されていきます。この奇をてらうことの多い世の中で、その営みは、一見、単調で、退屈で、凡庸なように見られるでしょう。しかし、実はそうではありません。去年の私と今の私は同じ私ではありません。主によって新たにされ、生まれ変わった私が、今ここにいるのです。その変化は大きく言えば、天地創造の御業にかかわることでありますが、私たちの目には留まらないないような小さな変化かもしれません。その同じことの繰り返しの中に、神の御業を味わい知ることが出来ますよう、私たちは静かにこのローソクの明かりに照らされたいと願います。

　今日は旧約と新約の二つの聖書箇所が読まれましたが、どちらも有名な箇所で、旧約のほうでは、いわゆるダビデ契約が語られています。そしてこの両者を橋渡ししているのが、系図であります。系図というのはマタイ福音書の冒頭などに記されていて、初めて聖書を読もうとした人が、この人名が連ねられた系図を読んでて、聖書を読むのをあきらめた、という話がよく聞かれます。

　この系図というのも一見単調で、同じことの繰り返しのようであります。しかし、この系図が新約聖書の冒頭に記されているという事は、主なる神が系図という事を大変重んじているからにほかなりません。創世記二章４節に、「これが、天地創造の由来である。」とありますが、この由来という言葉と系図という言葉は同じ言葉であります。つまり、マタイ福音書の冒頭の系図は、主なる神の天地創造の次第を物語っているのです。

　そこに記された一人一人は、主なる神からダビデに与えられたダビデ契約、すなわち主なる神からの約束をひたすら信じて、そしてその約束を次の世代へと語り継いだのであります。その営みは、次から次へ、信仰の灯（ともしび）を次の人に受け渡していく、静かな営みであったといってよいでしょう。その営みの特徴の一つは貞潔であったということです。貞潔なマリアの胎の内に主イエスは聖霊によって宿されました。このマリアのように、系図に並べられた人たちはみな、貞潔を旨として、御心に聞きしたがって生きたのです。

　今日はルカ福音書に記された系図を見てみますと、新約１０６ページ下の段になりますが、イエスはヨセフの子と思われていた。とあります。思われていた、という言葉には深い意味が込められているように思います。つまり、主イエスがダビデの子孫であることは、みんなからそう思われていた、のであります。ここではみんなの思いが、その生物学的な事実よりも大事になってきます。そして私たちも、思いによって、また信仰によって、ダビデの子孫に連なっていくのです。

　この系図を読み進めますと、色々な人が出てまいります。ダビデもいれば、ルツの夫ボアズの名もあります。これは私たちが、日本史や世界史の教科書で目にする系図のたぐいとは、違いがあります。皆さん、ヨセフという人は、ダビデというイスラエルの王族の血統の子孫なのに何で、ガリラヤで貧しい大工をしていたのか、疑問に思われたことはないでしょうか。ここら辺に、世俗の系図との違いが表れています。世俗的に考えれば、例えば、源頼朝は、少年の時、伊豆の蛭が小島に流され暮らしていましたが、関東の武者たちが、この方は大将の直系の嫡男で在らせられるぞ、という事で、担ぎ上げられて将軍となりました。しかし、聖書では、そういう世俗の覇権争いに系図が用いられることはありません。テモテへの手紙では「愚かな議論、系図、争い、律法についての論争を避けなさい」と記されておりますし、又マタイによる福音書には「『我々の父はアブラハムだ』などと思ってもみるな。」と記されております。つまり私たちは、日本史世界史でのように常に、系図を見て自分の先祖を誇ったり、又、それを覇権争いの為に利用しようとしたりする誘惑から無縁ではないので、このように聖書は私たちを戒めているのです。

　聖書に書かれた系図は、マリアの貞潔さの内に、主イエスが宿られたように、子々孫々が貞潔を守って、全てを神の計画に委ねて、静かにダビデ契約を次の世代につなげていった天地創造の御業の記録なのです。

　ではその今日の旧約聖書の箇所に顕れた、ダビデ契約とはどんなことだったのでしょうか。私たち人間に示された主なる神の約束とはどんなことだったのでしょうか。それはサムエル記下７章11節からに、その通り記されておりますが、ここでいわゆる集合人格として、私たちをも含めた複数形を意識して読んでまいります。「主はあなたがたに告げる。主があなたがたのために家を興す。あなたがたが生涯を終え、先祖と共に眠るとき、あなたがたの身から出る子孫に跡を継がせ、その王国を揺るぎないものとする。この者がわたしの名のために家を建て、わたしは彼の王国の王座をとこしえに堅く据える。わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる。彼が過ちを犯すときは、人間の杖、人の子らの鞭をもって彼を懲らしめよう。わたしは慈しみを彼から取り去りはしない。あなたがたの前から退けたサウルから慈しみを取り去ったが、そのようなことはしない。あなたがたの家、あなたがたの王国は、あなたがたの行く手にとこしえに続き、あなたがたの王座はとこしえに堅く据えられる。」

　ここでの、彼、彼が過ちを犯すときは、人間の杖、人の子らの鞭をもって彼を懲らしめよう。の彼は主イエスのことをも指しているようですが、もちろん「あなた方の家」「あなた方の王国」にこの彼は含まれております。それどころか、彼こそが「あなた方の家」「あなた方の王国」のカシラであります。私たちはカシラである主イエス様がいなくては生きられないにも拘わらず、このように、時として、主イエスをないがしろしてはいないでしょうか。

　そのような罪を犯してしまう私たちですが、その発端はこのダビデ契約の在り方にすでに表れています。主なる神はダビデに対して、ダビデ契約のその核心的な事柄である、主イエスの誕生と復活の出来事を、なぜはっきりとその名を語って口にされなかったのでしょうか。なぜ、あなた方の内にイエスキリストが来られて、彼があなた方を救うとはっきりと言われなかったのでしょうか。

　そこには、主なる神が私たちに託された、静かな信仰の継承という事があるように思われます。その信仰は今まで見てきましたように聖書の系図によって、ヨセフにまで継承され、その妻マリアに主イエスは宿られたのでした。ヨセフのいいなずけであったマリアは、ある日突然、天使ガブリエルの訪問を受け、「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」という不思議な祝福の言葉を受けます。マリアは戸惑い、考え込んだ、と聖書には記されています。彼女のこのリアクションは当然のように思われますが、続いてガブリエルはもっと、マリアを驚かせ恐れさせるような事実を告げ知らせるのです。貞潔なマリアが「あなたは身ごもって男の子を生む」と告げられた時感じたのは、世間的な恐れでもありました。当時は、不貞を犯したいいなずけが、そのことが明るみになったときは死罪に処される時代で在りましたし、マリアは貞潔を重んじるダビデの家には、いられなくなると思ったことでありましょう。

　次に天使ガブリエルは「あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。」と告げて、ダビデ契約がマリアの中で成就することを告げ知らせるのですが、ダビデ家の一員でないこの時のマリアが、どれくらいダビデ契約を信じていたのかはわかりません。想像しますに彼女はあまりダビデ契約を信じていなかったのではないでしょうか。ですから次に彼女の口をついて出てきた言葉というのは「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに。」という率直な心情の吐露だったのです。

　マリアの信仰が記されるのはここからです。天使ガブリエルは言います。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。神にできないことは何一つない。」

神にできないことは何一つない、というお言葉をマリアは素直に信じて、マリアは「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」と答えるのです。

　ダビデ契約をそんなには信じてはいなかったけれども、ここで主のみ言葉を聞いて、それに素直に聞き従ったマリアの姿は、今の私たちの姿に相通じるところがあります。私たちは血統の上ではダビデから遠い者たちですが、やはり、マリアと同じように主のみ言葉を聞き、それを信じて、洗礼を受け、聖霊によって新たに生まれ生かされている者で在ります。主なる神は、ダビデ契約を血のつながりのある者たちだけに約束されたのではありません。当然、それは今ここにいる私たち信者一人一人との約束であるのです。主なる神はこのようにすべての人間との約束となるように、あえてほのめかしつつダビデ契約を結ばれたのではないでしょうか。

　神と人間の永遠の約束、私たち人間をすべて「あなた方の家」の一員として、主イエスとともに永遠の住まいに招かれようとしている、主なる神の私たちに対する約束は、はじめ聖書の系図を通して伝えられました。そして時が満ち、ヨセフの妻マリアの胎に聖霊によって主イエス様をお与えになり、そして、イエス様の十字架の死と復活の出来事を起こされました。そしてそれを信じる者が、その信仰によって永遠の住まいに住まうものとされるという福音が、今、告げ知らされています。私たちもその神の永遠の約束を信じ、心と体でその信仰を証していきたいと願います。

お祈りします

天に居ます私たちの

今、この地上は、闇に包まれています。病院に働く方々、施設に働く方々が、大変困難な仕事に取組み、又様々な心の重荷を背負われて、辛苦されています。どうか主よそれらの方々をあなたの御光によってお救い下さい。あなたの御手を差し伸べて、いく道をお示しください。

　又、私たちは、親しくしている人たちに会えず、孤独を感ずる日々を送っています。すべて信じる人の親しい友人であります主よ、どうかあなたが私たちの間に立ち、私たちが親しく交わることが出来るように、私たちを聖霊で満たしてください。

来週のクリスマス主日礼拝に向けて私たちは、又世の中に送り出されますが、その一日一日があなたの祝福の内に守られ、あなたの栄光をあらわせますよう

又、私たちがあなたの恵みによって罪赦され、聖餐を受けるにふさわしい心と体に整えて下さいますように。

父と聖霊と共に一体であって代々に生き支配されて